Discussion Paper No.83

BDF 普及による環境意識向上のシナリオ
－ベトナムハロン湾におけるエコツアーの現状と可能性－

大阪市立大学大学院経済学研究科博士研究員
高橋　玲

2014 年 8 月 3 日

目次

１．地域住民の意識改革手段としてのエコツアー 1
２．調査方法 5
３．調査結果(1)：環境に対する意識とツーリズムの実態 6
４．調査結果(2)：BDF に関する認識と導入可能性 8
５．考察 9
６．結論 10
参考文献 12

１．地域住民の意識改革手段としてのエコツアー

ベトナムでは近年、経済発展とともに化石燃料の消費が増え続けており、大気汚染をはじめとする環境問題が深刻化している。これらの環境問題を解決するために、我々は現在、植林・製造・利用を一体化したバイオエネルギーの生産システムを構築する研究を行っている。ベトナムの荒廃地にジャトロファ(Jatropha Curcas)を植林し、高品質 BDF(Bio Diesel Fuel、以下 BDF と略す)を安定的に生成する方法を確立するとともに、製造された BDF を、公共交通機関や船舶などの燃料として利用するシステムを作ることが我々の課題である[1]。

ところで、BDF は、たとえ燃焼の際に炭酸ガスを排出するにしても、その原料である樹木や農作物が成長する過程において、それらの二酸化炭素はまた吸収されるという合意が成立しているがゆえに、ゼロエミッションであるとされている[2]。したがって、高品質の BDF が生成される方法が確立されさえすれば、当該社会に BDF がすみやかに普及し、環境問題が自律的に改善されていく、と思われるかもしれない。しかしながら環境問題の改善は、そのような単純なシナリオで達成されるものではない。

単純に、経済的な観点から評価をするのであれば、BDF はその他の化石燃料よりも高価である。この現状が変わらない限り、当該社会におけるエネルギーの使用者が、わざわざ BDF を選択するとは考えにくい。使用者が社会生活の各場面において、主体的に「BDF を選択」する、あるいはできる、シナリオを作り出すことが肝要である。そしてそのシナリオが整備されて初めて、BDF の大規模普及が実現すると考えられる。したがって、我々は、経済的見地から見れば追加的コストを必要とする「環境配慮的行動」が、たとえそれが市場の中で直接的に生成されるものではないにせよ、何らかの経済的便益につながる道筋を明らかにしなければならない。この便益のもつ意義が使用者たちによって理解されない限り、彼らは追加的コストを払う意思をもたないだろう。

我々は、ベトナムの有名観光地であるハロン湾地区(Ha Long Bay)において現地調査を行った。ハロン湾は、ベトナムの首都ハノイから東に約180kmに位置する北ベトナム最大の観光地である。クアンニン省ハロン市の南に広がる海域(約1553 平方キロメートル)には、1969 の島がある。石灰岩島が乱立する海域は独特な景観を構成しているが、その島々は、人が生活するには急峻すぎる地形である。そのため、「筏住居」と呼ばれる家屋に暮らす水上生活者たちがいくつかの「水上村」を形成している。「豊かな生態系」「生物の多様性」「地質学的価値」などが評価され、1994 年にはユネスコの世界遺産にも登録された。世界遺産登録によって観光客の数は増加し、ハロン湾の景観を楽しむクルーズ船の数もまた増加している。我々はいくつかのクルーズ船に BDF の試験的利用を依頼しており、今回は「BDF 利用と観光」というテーマから、この地で現地調査を行うことにした。

ところで現在、ハロン湾では、海上ごみ、水質汚濁、自然破壊といった環境汚染が深刻である。例えば、ハロン湾におけるごみの主な発生源は、主に以下の４つに分類される[3]。①水上村エリアの生活ごみ、②観光船からでるごみ、③観光ポイントで観光客やスタッフが出すごみ、④川の上流から流れつくごみ、である。ごみの発生量は、１日に 9.5 ㎥ 程度であり、厨芥類が 40%、無機物、プラスチック袋、ビン等が 60%である。また、周辺にある大規模な炭鉱[4]からの排水が大量にハロン湾に流れ込んでおり、水上村の住民が調理で使用する練炭の灰(練炭灰)やハロン市街からの排水とともに、水質汚濁の原因となっている。ハロン湾の世界遺産登録以来増え続けている観光客が、ごみを投棄したり自然破壊を行ったりすることも問題となっている。水上村のひとつである Cua Van 村の老人は、観光客増加に伴うごみ問題を以下のように嘆いている。

---

[1] SATREPS チームは５つのグループ、つまり、 [グループ１] : 最適な BDF 原料樹種の選択と栽培方法の確立、[グループ２] : 汚染土壌の現況調査と汚染改善技術の開発、[グループ３] : クリーンな高品質 BDF 製造プロセスの確立、[グループ４] : BDF の公共交通機関、農業機械等への利用と大気汚染削減の評価、[グループ５] : 多益性の検証(気候変動対策、大気汚染及び土壌汚染改善、貧困撲滅)と経済効果、に分かれている。筆者は[グループ５]のメンバーであり、BDF の利用拡大が環境改善へとつながるシナリオを、社会経済的見地から検証する役割を担っている。

[2] 「ゼロエミッション」とは「CO2 ニュートラル」の意[北尾 2002: 699]。

[3] [田中 2011] [土居 2011]を参照。ベトナム都市部での廃棄物の回収率は 45～76%だが、農村部では 0～20%と低い水準にある。その理由は、技術と人的資源の不足、不十分な管理、車両の不足、資金の不足である。効率的な廃棄物管理システムが存在していない地域では、市民は廃棄物を河川、湖、住居付近の土地に投棄している。行政管理外で野焼きや埋め立ても行われていて、水質汚染や土壌汚染の原因の一つになっている[日本貿易振興機構海外調査部 2011: 2-9]。

[4] ハノイ平原北東の山地は世界的な無煙炭の産地で、積み出し港の名前から「ホンゲイ炭」と呼ばれる。採掘されたホンゲイ炭は、陸路をトラックや鉄道で、川を船で、各地へ運ばれる。一部はハロンの港へ集められ、外航船に積みかえられて輸出される[須藤 1999: 9-10]。

Cua Van 村の 74 歳のチーフ Nguyen Van Cho は嘆いてこう言う。「村から出る毎日のごみと、通過する観光船からのごみがこのあたりの魚を殺してしまい、カードゲームぐらいしかすることがなくなってしまったよ。魚は年々死んでいて、今年(2012 年)は初めて貝類も死んじゃった」。ユネスコ世界遺産に登録されて以来、何千もの観光客が来る。しかし、30 キロほど沖合にある Cua Van 村の 600 人の住民は、ツーリズムからはほとんど利益を得ていない。43 歳の Nguyen Thi Que は言う。「観光船から小さな観光客集団を乗せて村の周りをまわるボートの仕事があるが、それは月に 100 万ドンくらいにしかならないわ」。代わりに彼らは「水文化」、つまり、魚と貝の養殖によって生きている。しかしながら、排水と家庭からのごみが海に廃棄され、彼らの生計を破壊している。ごみが流れ着いても、それが害だということはわかるのだが、ただただそれを外に放り投げるしかない。他に選択肢はない[5]。

また、ハロン湾の海上に筏住居を並べて生活する水上村住民たちの生活スタイルそのものも、環境に悪影響を及ぼしていることが指摘されている。彼らは海の上に暮らし、魚を養殖するなどして、いわば「自然と共生する社会生活」を実践している。そして同時に、本来「海の上の暮らし」とは両立し得ない電化製品や西欧的文物などを求めながら、いわば「文明的な社会生活」を実現しようともしている。「ごみ問題」の本質は、表層的には、この二つの相反する社会生活の齟齬にあると言えるだろう。しかしながら他方では、彼らの取る行動が、最終的には彼らの社会生活に負の効果を与えることになるという点を、彼らが意識の点で理解していないことが、この問題の本質ではないだろうか。

近年、観光は、ハロン湾地域の主要産業になりつつある[6]。観光客が投棄するごみが増える一方で、「観光対象」のひとつである水上村の住民もまた、ごみを海に投棄し、練炭灰を海に流している。環境汚染が深刻な光景を見れば、きれいな風景を求めて訪れた観光客は失望するだろう。仮にユネスコの世界遺産指定が外されるという事態になれば、観光業は深刻な打撃を受けるに違いない。現状では、水上村住民が観光業から得ている経済的便益は限定的である。しかしながら、観光業収入の、彼らの総収入に占める割合は、決して小さいものではない。さらに長期的に見れば、水質汚濁は、彼らの生業である漁業にも重大なダメージを与えることは予想されうる。

しかしながら反対に、環境問題に積極的に取り組んでいる水上村住民の姿勢が見られたならば、その点を評価する観光客の数は増加する可能性があると言える。「環境」と「観光」は不可分の関係にある。そしてここに、ハロン湾地域に広く BDF が普及するためのヒントが見出されうる。

「エコツアー」は、環境保全と経済的便益、さらに地域振興という三つの目的を結びつける手段として、近年注目されている[7]。従来の「マスツーリズム」は、観光の大衆化を実現したが、他方、「観光公害」を自然環境にもたらす結果を生んだ[8]。そこで、「少人数、ガイドラインや規制、ガイドの同行」などの方法により、自然に対する負荷を少なくし、収益の一部を自然環境のモニタリングに活用するなど、環境保全に役立てることを目指すエコツーリズムが推奨される。次に、従来は観光資源とみなされなかった自然環境などが新たに着目されるようになり、新たな観光需要を創出し経済的便益をもたらすエコツーリズムの形態が評価されるようになった。最後に、地域住民と観光客との交流を活発化させること、具体的には、地域住民が旅行業、宿泊業、飲食業、運送業、ガイド業などに関与することが、地域の雇用創出と地域振興につながるとともに、彼らが地域に対して誇りや愛着を感じるようになるという効果が期待される。

「エコツアーとは何か」という定義やその方法をめぐっては、様々な議論があり、その解釈が定まっていない部分もある[9]。しかしながら、ここで我々が注目したいのは、エコツアーに従事する各主体の意識が、エコツアーに携わる実践

---

[5] [Guardian 2012]参照。

[6] 2012 年のデータによれば、送出国 1 位は中国(全訪問者の 21%、143 万人)、２位韓国(10%)、３位日本(8%)であり、ベトナムへの訪問者は、1995 年の 135 万人から 685 万人へと激増している[金井 2014: 97-98]。また、ハロン湾の観光客数も増加の一途をたどっている。1996 年には年間 24 万人であったが、2000 年には年間 200 万人にまで増加した。観光用客船の数も、1996 年の 100 隻から、2000 年には 400 隻まで増加した[張他 2008: (517-)1-2]。

[7] [敷田他 2008]参照。ベトナム観光省は、観光戦略の三つの柱として「エコツーリズム」「カルチャーツーリズム」「ヘリテージツーリズム」を挙げている[小林 2010: 57-58]。

[8] [石森 2002: 707-708]参照。

[9] 国際エコツーリズム協会は「エコツーリズムは自然環境を保全し、地域住民の福祉の向上につながる責任ある観光である」と定義し、オーストラリアのエコツーリズム協会は「エコツーリズムとは、自然体験を最大の関心としながら、環境や文化を理解・尊敬・保全することを涵養する生態学的に持続可能な観光である」と定義する。また、日本のエコツーリズム推進法では「観光旅行者が、自然観光資源について知識を有するものから案内又は助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、

を通じて変革される可能性を有するという点である。従来のエコツーリズムをめぐる研究では、その意義が上記の三つの目的との関連において論じられることが多く、エコツアーの実践を通した各主体の意識変革が環境問題の改善へとつながる可能性を指摘した研究はそれほど多くはない。太田が「エコロジー意識の象徴経済的側面」という術語ですでどく指摘しているように[10]、エコツアーに参加した観光客はその経験を「文化資本」として蓄積する。彼らはツアーの後も、体験した環境配慮の姿勢を日常生活の中で実践しようとする「意識」をもつだろう。しかしながら、エコツーリズムに地域住民が正当に関与するシステムが構築されるならば、「文化貴族」としての観光客だけではなく、地域住民の「意識」もまた、そうした環境配慮の姿勢を体現する行動へと向かわせるものになるに違いない。

人間は、一方では、「手段－目的関係」を合理的に精査した上で、合目的的に行動を実現する。しかしながら他方では、経験の中で培われた「ハビトゥス」[11]に導かれた慣習的な行動を実践する。例えば、ある社会空間には、「環境保全」という明確な目的の実現のために「BDF を選択的に使用する」という「合目的的行動」がある。他方、「ガムをかんだら包み紙をそこらへんにポイ捨てせずにポケットに入れておき、ごみ箱を見つけたらそこに入れる」といった「慣習的行動」も見られるだろう。環境問題の解決には、前者だけではなく後者を考慮する視点が必要である。そしてエコツアーは、各主体が実現する実践の諸相と相互作用とを通して、各主体のハビトゥスが再帰的に変革される手段となりうる。

ツアー会社、観光客、そして水上村は、現在のハロン湾ツーリズムにおける三つの主体である。とりわけ、ハロン湾の環境汚染の、いわば「元凶」のひとつとして考えられている水上村住民の環境意識を変革することは喫緊の課題である。例えば彼らは、その日常生活の過程において、練炭灰を捨てる、ごみを捨てる、下水や生活用水を海に直接流す、などの行動を取っている。設備が整備されていないために、他の選択肢がないということも考慮に入れる必要はある。しかし、彼らのそうした実践が、彼らのハビトゥスを再帰的に再生産しているだろうことは想像に難くない。ゆえに彼らは、環境へ負荷をかけている「代表」であると認識されている現状がある。

その彼らに対して、練炭灰から堆肥をつくる方法を「教授」したり、ごみを捨てることは自然環境にとっていかなる意味を持つのかという点を「教育」したりすることは、彼らの「合目的的行動」のあり方を変革させる良い契機となるだろう。同様に、現段階では実現していないものの、村内で利用されている発電機の燃料として BDF を使用したり、クルーズ船の寄港地として観光客に接する機会を増やしたりといった試みは、彼らの環境汚染に対する認識を拓かせる契機になるかもしれない。

しかしながら、より大事なことは、彼らのハビトゥスに、環境保全に対する「実践感覚」[12]が積極的に刻まれ、彼らの社会生活においてそうした「慣習的行動」が持続的に実現するという点である。そのためには、環境保全だけではなく、経済的便益と地域振興もその目的とするエコツアーの意義が各主体、とりわけ水上村住民によって共有され、そこに彼らが主体的に関わっていくための体系作りが欠かせない。

重要な点は、経済的便益実現および地域振興の方法の二つである。

経済的便益実現については、ツアー会社、観光客、水上村の各主体で、それぞれのシナリオが異なる。

はじめに、ツアー会社に関しては、BDF 使用や環境配慮的なツアー内容の実現に必要な追加的コストを、観光客に負担してもらう妥当な線を設定する必要がある[13]。

第二に、観光客に関してであるが、彼らにとっての直接的な経済的便益を考えることは、少し難しいかもしれない。しかしながら、環境配慮的なエコツアーへの参加を希望する観光客というのは、多かれ少なかれ、環境保全に関連する諸実践に主体的に関わることに象徴的価値を見出し、それらを「文化資本」として蓄積することを肯定的に捉えているといえる。彼らは、ハロン湾におけるエコツアーに参加したという具体的経験を「文化資本」として蓄積する。そして彼らは、社交や趣味サークルといったある特定の市場において、同種の正統性を共有する他者からの尊敬や評価といった形で、何らかの象徴的利潤を獲得するだろう。そしてその象徴的利潤は、彼らにさらなる社会的差異を与える。結果として「エコツアーへの参加」という行為は、彼らの階級峻別と社会的地位の向上という形において、彼らに経済的便益を与えるかもしれない。

これに関する知識及び理解を深めるための活動」と規定している[敷田他 2008]。

[10] 太田は、エコツーリズムの観光現象を考察するための従来の理論装置は、「経営学的分析」(観光の経済的影響を追及)と「文化の商品化」(文化が観光対象になることへの批判)の二つに収斂していると指摘している[太田 1996: 208]。

[11] ブルデューの術語。ハビトゥスについては[高橋 2009]を参照。

[12] ブルデューの術語。[高橋 2009]を参照。

[13] 本件については、SATREPS group5 の Phuong [Phuong2013]が研究を進めている。

最後に、現在のツーリズムの現況において、水上村の住民は、観光業からの経済的便益をほぼ獲得できていないということが指摘されうる。上で引用した Cua Van 村の老人の嘆きにも見られたように、現在のハロン湾ツーリズムに対する彼らの関わり方は、ボートなど水上交通サービスやレンタルカヤックなどの業務に限定されている。業務の範囲を拡大させることもさることながら、彼ら自身が BDF を積極的に利用する生活過程を構築するなどして、環境保全に取り組む姿勢を提示することが重要であるだろう。その社会生活モデルそのものをひとつの観光資源にすれば、エコツアーに関心を持つ観光客の増加という経路を経て、彼らに経済的便益がもたらされる可能性があるだろう。

もちろん、現状のシステムでは不十分である。なぜなら、水上村住民とツーリズムとの関わり方が極めて限定的であり、観光客の増加がそのまま彼らの便益へつながる仕組みが整っていないからである。

そこで、エコツアーのもうひとつの柱である地域振興のシナリオが重要となる。例えば、水上村住民が、ガイドやインタープレターとしてツーリズムに積極的に携わることができるような雇用関係を整備するとか、観光客をホームステイとして受け入れる制度を作る、といった取り組みが求められるだろう。経済的な文脈において、水上村という観光資源をツーリズムの体系に包摂するようなシナリオが必要とされる[14]。また同時に、現在、水上村で練炭灰を堆肥にする試みが実際に行われていること[15]、そして、将来、BDF を取り込んだ社会生活が実現した場合にはその内容などが、「象徴経済的」市場で価値を有するような形で、積極的に広告されなければならない。彼らの「合目的的取り組み」や「慣習的行動」の実践が、エコロジーに価値を見出す観光客の増加を生み、結果として発生する経済的便益が彼らに還流する。このシナリオがあれば、彼らの「環境に配慮した合目的的行動」と「環境配慮的なハビトゥスが紡ぎだす慣習行動」が最終的には経済的便益に結実するのだという認識を、彼ら自身がもつことになる。そして彼らは、今度は意図的に、かつ主体的に、環境保全につながる行動に正統性を見出すようになるだろう。これこそが、「環境配慮的行動」が市場において価値を持つために必要なシナリオとなる。

持続可能な環境保全のあり方は、当該主体の意識が改革され、「合目的的行動」だけではなく「慣習的行動」においてもまた、環境配慮的な要素が実現することであり、そのための手段として、BDF の使用とエコツアーの実践が理解されるべきである。

---

[14] 例えばマレーシアのサバ州では、世界最大の国際的自然保護団体「世界自然保護基金(WWF)」が、政府機関、農園を所有する企業、観光業、コミュニティなどあらゆるセクターと提携し、「命の回廊」ビジョンを作成した。そしてそのビジョンに従い、土地の提供という形で農園主に働きかけ、植林活動に観光客を導入するプログラムを構築した。地域住民が農園に頼らずに済むようにホームステイなどの観光プログラムを指導し、現在では村が立ち上げたエコツーリズム協同組合がこのプログラムを運営しているという[海津 2012: 79-83]。

また、ケニアのションポーレロッジ(Shompole)では、住民との協働による施設づくりと運営が特徴になっている。建設は、100-200 人の地元民が都会に近い賃金で働き、開業後も 40 人の常勤労働者を雇っている。環境配慮的設備の整備に力を入れ、将来的にはすべてを再生可能エネルギーに依存することを目指している。地域住民がプロジェクトに参加することで、ロッジ運営に住民の知恵が生かされている。このロッジの運営姿勢は、エコフレンドリーな価値を重視する観光客の関心を集めており、決して安くない宿泊料にもかかわらず予約でいっぱいの状況だという[杉本 2006: 84-85]。

[15] 2009 年 9 月以来、ハロン湾では「JICA 草の根プロジェクト」が行われている。これは、クアンニン省人民委員会に属するハロン湾管理局の要請により、JICA の支援のもとで実施されたものであり、「廃棄物の削減及び有効利用」「ハロン湾の水質管理」「環境教育及びマングローブ植樹」などの活動を行っている。具体的には、水上村でのゴミの発生量、及び、有機ゴミと無機ゴミの割合の調査を行い、家庭からの生ごみのコンポスト化のための施設の建設したり、ハロン湾の環境保護に関する水上村の子供の意識を向上することを目的として、湾内の水上村の小学校の先生や子供向けの簡易な水質測定に関する学習指導（透明度や水深測定）を行ったりしている。

２．調査方法

本研究の目的は、エコツアーにまつわる諸実践を通して、関連する各主体の環境意識が改善され、それぞれの「合目的的行動」と「慣習行動」の両側面に環境配慮的要素が追加される可能性を探ることである。BDF を内包させたエコツアーはそのためのひとつの鍵となる。筆者は、ツアー会社、観光客、および水上村住民という三つの主体のうち、特に水上村の人々を取り上げる。彼らの環境に対する意識と、BDF に関する認識を明らかにしながら、彼らがエコツーリズムと積極的に関わっていくシナリオを追究する。

2014 年 2 月 21 日から 3 月 1 日にかけて、ハロン湾地区で予備的調査を行った。これは、翌年に予定している本調査の基盤となるものである。また、水上村の人々と現在のツーリズムとの客観的関係を明らかにするために、ツアー会社や観光客に対しても予備的調査を行った。調査の具体的内容は以下のとおりである。観光船業者であり、BDF 使用にも積極的に取り組んでいる「Bai Tho Victory 社」では担当者にインタビューを行い、BDF の現状と展望について意見を聞いた。また、「Vung Vieng Village」「Cua Van Village」「Ba Hang Village」の三つの水上村で、質問票調査とインタビューを行った[16]。ハロン湾の観光業を管理監督する HBMD(Ha Long Bay Management Department)[17]では、担当者にインタビューを行い、BDF に対する展望を聞いた。そして、デイクルーズに参加していたベトナム人観光客[18]、オーバーナイトクルーズ参加の主に欧米系外国人観光客、及びベトナム人の同クルーに対して質問票調査を行った[19]。

以下では、水上村で行われた質問表調査結果の中から、「環境に対する意識とツーリズムの実態」「BDF に関する認識と導入可能性」についての回答とその考察を紹介する。

---

[16] ハロン湾洋上には、約 350 世帯、約 1500 人が、15 か所以上に居住している。水上村の形態をとっているのは主に４つ、Cua Van 村、Cong Tau 村、Vong Vieng 村、Ba Hang 村である[張他 2008: (517-)2-3]。

[17] ハロン湾管理局(HBMD)は、クアンニン人民委員会(PPC)に属しており、世界遺産地域を中心に、ハロン湾全体を直接管理する組織である。1995 年に設立され、その職能は、世界遺産であるハロン湾の自然価値を保存・維持し発展させることである。ベトナム文化・スポーツ・観光省(Ministry of Culture, Sport and Tourism)と National Commission for UNESCO in Viet Nam によって運営されている。

[18] デイクルーズ船に協力を依頼し質問票調査を行ったが、回答者は、ホーチミン市でツーリズムを専攻する学生の団体であった。

[19] ハロン湾は観光地域と水上村地域に分かれている。観光地域には観光用の８つのルート、４つの宿泊ポイントがあり、800 人の観光客が 65～75 隻の観光船に乗って一晩を過ごすことが可能である。湾内で一晩投錨することを許可された観光船は 99 隻ある[田中 2011]。クルーズの形態としては、湾内を移動しながら一泊ないし数泊をすることを目的とする「オーバーナイトクルーズ」と、石灰岩洞窟や水上村といった観光スポットを数か所訪ねながら日帰りする「デイクルーズ」の二つがあり、基本的に観光客は、これらのどちらかのツアーに参加することになる。公共交通としての航路はないため、個人旅行の形で観光スポットを探訪することは事実上不可能である。

３．調査結果(1)：環境に対する意識とツーリズムの実態

以下は、三つの水上村で行われた調査票の結果である。

C-5：あなたの家で最も使用するエネルギー源はどれですか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
ガス(プロパンなど)	5	13.9%	1	7.7%	0	0.0%	4	28.6%	0	0.0%
電気(発電機)	7	19.4%	5	38.5%	2	25.0%	0	0.0%	0	0.0%
石油 or 灯油	11	30.6%	6	46.2%	3	37.5%	2	14.3%	0	0.0%
石炭 or 練炭	11	30.6%	1	7.7%	2	25.0%	7	50.0%	1	100.0%
木材	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	1	2.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	7.1%	0	0.0%
エネルギーは使用しない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	1	2.8%	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	0	0.0%
合計	36	100.0%	13	100.0%	8	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	35		13		7		14		1	

D-1：あなたは現在、以下の観光業収入がありますか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
ある	26	72.2%	10	76.9%	2	25.0%	14	100.0%	0	0.0%
ない	10	27.8%	3	23.1%	6	75.0%	0	0.0%	1	100.0%
無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	36	100.0%	13	100.0%	8	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	36		13		8		14		1	

D-2：D-1 で「ある」と答えた方、その内容は何ですか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
ボートで海産物を販売	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	
ボートでシーフードを販売	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	
ボートでギフトを販売	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	6.7%	0	
筏で売店を経営	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	
ガイドやインタープレター	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	
交通サービス(水上タクシーや送迎など)	22	81.5%	8	80.0%	1	50.0%	13	86.7%	0	
観光客のホームステイ受け入れ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	
その他	3	11.1%	1	10.0%	1	50.0%	1	6.7%	0	
無回答	1	3.7%	1	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	
合計	27	100.0%	10	100.0%	2	100.0%	15	100.0%	0	
回答者数（合計－無回答）	26		9		2		15		0	

D-6：あなたは何がハロン湾の観光客を最も魅了すると思いますか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
奇岩や洞窟などの自然資源	23	39.0%	9	32.1%	5	31.3%	9	64.3%	0	0.0%
ダイビングや釣りなどのアクティビティー	13	22.0%	7	25.0%	5	31.3%	1	7.1%	0	0.0%
水上村の文化的かつエコロジカルな生活	21	35.6%	12	42.9%	5	31.3%	4	28.6%	0	0.0%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	2	3.4%	0	0.0%	1	6.3%	0	0.0%	1	100.0%
合計	59	100.0%	28	100.0%	16	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	57		28		15		14		0	

D-7：あなたは何がハロン湾の観光客を失望させると思いますか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
ごみの山や水質汚濁などの環境汚染	16	44.4%	3	23.1%	3	37.5%	10	71.4%	0	0.0%
観光地の混雑	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
水上村など地域共同体との交流の少なさ	2	5.6%	0	0.0%	0	0.0%	2	14.3%	0	0.0%
その他	4	11.1%	2	15.4%	0	0.0%	2	14.3%	0	0.0%
無回答	14	38.9%	8	61.5%	5	62.5%	0	0.0%	1	100.0%
合計	36	100.0%	13	100.0%	8	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	22		5		3		14		0	

４．調査結果(2)：BDF に関する認識と導入可能性

以下は、水上村で行われた、BDF の認識に関する調査結果である。

D-8：あなたは温室効果ガス削減のための新燃料 BDF を知っていますか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
はい	1	2.8%	1	7.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
いいえ	33	91.7%	12	92.3%	7	87.5%	14	100.0%	0	0.0%
無回答	2	5.6%	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	1	100.0%
合計	36	100.0%	13	100.0%	8	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	34		13		7		14		0	

D-12：あなたたちがもし、BDF 使用などのエコライフを実践し、その結果、伝統的な水上村の生活が守られたとすれば、観光客はそのことをどのように評価すると思いますか？

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
とても評価する	33	91.7%	11	84.6%	8	100.0%	14	100.0%	0	0.0%
評価する	1	2.8%	1	7.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
どちらでもない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
評価しない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
まったく評価しない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	2	5.6%	1	7.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%
合計	36	100.0%	13	100.0%	8	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	34		12		8		14		0	

D-14：あなたは日常生活で BDF を使用することに関心がありますか。

選択項目	総計		Vong Vien Vil.		Cua Van Vil.		Ba Hang Vil.		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
無条件に関心がある	3	8.3%	1	7.7%	2	25.0%	0	0.0%	0	0.0%
もし利益になるなら関心がある	32	88.9%	12	92.3%	6	75.0%	14	100.0%	0	0.0%
少しだけ関心がある	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
関心がない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	1	2.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%
合計	36	100.0%	13	100.0%	8	100.0%	14	100.0%	1	100.0%
回答者数（合計－無回答）	35		13		8		14		0	

５．考察

以上はあくまでも本調査の前段階である予備調査の一部であるため、総体的な考察をするには不十分なデータである。しかしながら、これらの結果からは、いくつかの傾向が看取される。

まずは「C-5：あなたの家で最も使用するエネルギー源はどれですか」の結果から、水上村の生活で使用されるエネルギー源は、「石油または灯油」(30.6%)、「石炭または練炭」(30.6%)、「電気(発電機)」(19.4%)、であることがわかった。ここには挙げなかったが、彼らの所有品の中に電化製品が多いことを考えると、日常生活における発電機の重要性は高そうである。観光船の発電機で既に使用されている BDF を水上村の生活に普及させるシナリオは、少なくとも技術的には可能であるだろう。

「D-1：あなたは現在、以下の観光業収入がありますか」及び「D-2：D-1 で「ある」と答えた方、その内容は何ですか」の質問では、限定的ではあるものの、彼らが現状のツーリズムに巻き込まれているさまを見出すことができた。それぞれの村による傾向の差は認められるものの、総計で 72.2%の家計が、何らかの観光業収入を得ている[20]。しかしながらその内訳を見ると、総計で 81.5%の人が「水上タクシーなどの交通サービス」に従事しており、その他の業務に関連する割合は非常に低い。ハロン湾ツーリズムの現行システムにおいては、水上村が排他的に位置づけられていることがわかる。ここでは割愛したが、ツアー客がさらなる水上村との「交流」を欲しているデータもある。水上村が主要な要因としてツーリズムの中に位置づけられる余地はまだまだあると言えよう。

ハロン湾の環境と観光についての水上村の意識を問うた「D-6：あなたは何がハロン湾の観光客を最も魅了すると思いますか」及び「D-7：あなたは何がハロン湾の観光客を失望させると思いますか」では興味深い結果が得られた。現行のツアーの目玉である「奇岩や洞窟などの自然資源」(39.0%)に加えて、「水上村の文化的かつエコロジカルな生活」が観光客を魅了するのではないかと考えている水上村住民の数が 35.6%にものぼった。彼らが「エコロジカルな生活」をどの程度理解しているのかという点には些か疑問が残る。しかしながら、生活空間における観光客とのさらなる「交流」が、観光資源としての価値を持ちうるという点に、彼らは気づいているのではないだろうか。一方で、44.4%の人間が、「ごみの山や水質汚濁などの環境汚染」が観光客を失望させると考えており、環境汚染が観光に対して潜在的にもつ負の側面を、彼らがある程度認識していることが指摘できる。

次に、「D-8：あなたは温室効果ガス削減のための新燃料 BDF を知っていますか」では、ほぼ全員(91.7%)が「いいえ」と回答しており、BDF が全く周知されていないことがわかる。しかし、BDF についての説明を加えた上で、「D-12：あなたたちがもし、BDF 使用などのエコライフを実践し、その結果、伝統的な水上村の生活が守られたとすれば、観光客はそのことをどのように評価すると思いますか」と尋ねたところ、無回答以外の全員が「とても評価する」(91.7%)、「評価する」(2.8%)と回答している。「環境保全的社会生活モデル」が経済的便益をもたらすという具体的な道筋はともかく、それが観光客の評価を得るだろうということは、彼らの実践感覚に刻まれているようである。最後に、「D-14：あなたは日常生活で BDF を使用することに関心がありますか」に対しては、ほぼ全員が肯定的な回答をしている。しかし、「もし利益になるなら関心がある」(88.9%)が最も多い回答数を集めている点から、BDF を社会生活に取り入れるなどの「環境保全的社会生活モデル」が経済的便益をもたらすシナリオについて、彼らが十分には理解できていないことがわかる。

[20] 別の質問に対する結果からは、Vong Vien Vil.では 9 人(69.2%)、Cua Van Vil.では 2 人(25%)、そして Ba Hang Vil.では 14 人(100%)が何らかの観光業収入を得ており、その月額はおよそ、100 万ドンから 1000 万ドンの間にあることがわかった。

６．結論

以上より、ハロン湾をめぐるツーリズムのありようと水上村との、現状における連関が明らかになった。

はじめに、水上村の住民たちは、多かれ少なかれ、観光業から収入を得ている。しかしながら、村によっては、観光業に対する関与の仕方が積極的だったり消極的だったりする事実が見られた。さらに、現状のシステムにおいては、水上村住民が従事することのできる観光業の業務は限定的であり、観光客との「交流」も少ないことから、ツーリズムが生産する経済的便益が彼らのもとに十分に還流していないことが明らかになった。

第二に、彼らの日常生活空間そのものが「観光資源」としてある種の価値をもつこと[21]、そして同時に、ハロン湾の環境汚染が「観光資源」としての価値を減耗させうることを、彼らがある程度認識していることがわかった。

最後に、「環境保全的社会生活モデル」を実践することは、それが直接的な経済的便益をもたらすのかどうかという点は別にしても、観光客の評価につながるだろうという点については、彼らが認識していることが明らかになった。現時点での彼らの日常生活では発電機が必需品となっており、観光船の発電機で既に使用されている BDF を水上村の生活に普及させることは可能である。

本稿では、エコツアーに関与する三つの主体のうち、特に水上村の住民の現状を把握することに努めた。以上の点を踏まえて、水上村における BDF の普及を進め、構築された「環境保全的社会生活モデル」をひとつの「観光資源」としてエコツアーの主要な対象とし、エコツアーのシステムに積極的に関与することで水上村住民のハビトゥスに環境配慮的な要素が追補され、結果として彼らが環境に配慮した「合目的的行動」と「慣習的行動」の二つを日常的に実践するという「持続可能なシナリオ」を提言したい。

はじめに、水上村では、「BDF を日常的に使用した社会生活を行っている村」をキャッチフレーズにできるくらいにまで、村内に BDF を普及させることが肝要である。当然、現行のエネルギーに比べると追加的なコストが必要となるため、補助金や支援システムの構築は不可欠である。水上村住民が BDF を使用することの意味を認識できるような教育機会を設けること、そして、BDF を取り入れたその具体的生活内容を様々な媒体を用いて広く内外へ向けて発信すること、などが求められる[22]。

次に、水上村住民がハロン湾を巡るツーリズムに関与でき、同時に、彼らに利益の一部が還元されるようなシステム作りが必要である。現在、彼らが携わっているのは、観光客を手漕ぎボートに乗せて湾内を周遊するサービスの提供と、カヌーやカヤックの管理、そして小規模な商店経営、といったものに限られる。筆者は、最初に「調査者」として水上村でインタビューを行い、後日再び、今度は「ツアー客」として同じ村を訪れたが、水上村の住民たちとの交流がほとんどなく、村の生活を知る機会が全くなかったことに失望を覚えた。ベトナムの他の地域では実際に行われている「ホームステイ」や[23]、彼らとともに漁業や養魚の仕事を体験するオプションなどがあれば、ツアー客の満足度は上がるだろうし、水上村の生活実態に対する理解度も上がるといえよう。また、エコツアーには必須とされている、インタープレターの仕事に水上村住民が就くことができれば、観光客と住民双方にとってメリットが得られるだろう[24]。水上村住民の中には、インタビューの中で、「観光業の中でさらなる仕事に関与できる可能性があるならば積極的に携わってきたい」と答えた人も少なからず存在した。そうした「潜在的な企業者」が積極的に観光業に関与していけるような制度作りが求められる。また、現状では、水上村へツアー客が訪問する際に、ツアー会社から村に対して、入村料のようなものが一切支払われていないという事実がある[25]。生活文化や伝統的生業システムなどが、市場における「商品」と化すると、「文化の真正性」が損なわれてしまうといった議論があるのは事実である[26]。しかしながら、ツーリズムからの

---

[21] 自然環境などの生態的要素だけではなく、自然と共生している人々の活動もまた「生態資源」として、エコツアーの観光対象となる[山田 2002: 691]。

[22] 例えば、Bai Tho Victory 社のオーバーナイトクルーズ船では、船内発電機に BDF を使用しているものもあるのだが、その旨は、船内への入り口に掲げてある小さな銘板に書かれてあるに過ぎない。ツアー客に対しても、食事の時に簡単な説明があるのみで、広くその意義を周知しているとは言い難い状況である。

[23] 例えば白ターイ族の住む Hoa Binh 省 Mai Chau 村など[Doling2010]。ただし、ホームステイ制度が確立されるためには、清潔なトイレや十分なベッドといった設備の整備が不可欠であり、スペースや物理的状況に制限がある水上村では、乗り越えなければならない課題が多いのも事実である。

[24] 実際には、水上村住民は教育程度が低く、言葉の問題があるため、現状では困難である。調査票の結果では、水上村住民で、ツアーボートで働いた経験を持つものはごく少数であった。

[25] 村人へのインタビューによる。

[26] 大田は、「文化の商品化論の二極化」として、①文化が見世物になり本来の社会的な意味を失った事例、②かえって文化の自己展

経済的便益が水上村に還流するシステム作りという観点から考えると、ツアー会社と村との間に、一定の経済的関係を構築することは必要なのではないだろうか[27]。

最後に、こうした過程を経た上で達成されるべき、水上村住民のハビトゥスの変革である。冒頭にも指摘したように、通常の化石燃料よりも追加的コストが必要とされる BDF が、水上村住民によって選択的に使用される可能性は、現状ではゼロである。彼らはまだ、環境配慮的行動が潜在的にもっている市場価値を知らない。しかしながら、BDF を村内で使用し、「環境保全的社会生活モデルが確立された水上村」という特異な状況が広く内外に周知され、エコツアーに関する様々な雇用が創出された状況下であれば、主に先進諸国の「文化貴族」たちが参加するエコツアーがますます興隆するであろう[28]。彼らが追加的に支払う旅行コストの一部は水上村に還流する。水上村住民は、今や、環境配慮的行動は経済的便益をもたらすこと、反対に、環境破壊的行動は「文化貴族」たちの不興を買うことで経済的便益を減じることを、自らの観光業収入の増減によって体感することになる。今や、彼らのハビトゥスには、環境配慮的要素が追補され、「合目的的行動」のみならず「慣習行動」の位相にも、その要素が表出するようになる。

「持続可能なシナリオ」には二つの文脈がある[29]。ひとつは、人間が自然に働きかけて社会生活を営む仕方において、対象である自然体系を損傷させることなく、かつまた、人間の社会生活が発展し、経済成長を実現させる方法を探ること、もうひとつは、自前の自然環境とともにある生活の持続性に主眼を置くもの、である。冒頭でも指摘したように、ハロンの水上村では、漁業や養魚とともにある「自然共生的生活システム」と、西欧的文物を求める「文明的生活システム」との矛盾が、「水上生活」という厳しい環境の中で表出している。彼らの多くはいわゆる「陸上がり」を望んでいないが、現状では彼らは環境破壊の因子であるとみなされており、彼らを陸に移住させる計画が近い将来実行に移される[30]。「陸上がり」に関連する問題の考察は次回の調査の課題とするつもりであるが、彼らがエコツーリズムに積極的に関与することは、彼らの「自然共生的生活システム」の持続性にも、一定の寄与をもつと思われる[31]。同時に、環境配慮的要素が追補されたハビトゥスからは、環境配慮的な「慣習的行動」が持続的に紡ぎだされるようになっていくだろう。途上国で良くみられる「ごみのポイ捨て」などの「慣習的行動」は、彼らのハビトゥスに環境配慮的要素が追補されていないことと、環境破壊的な行動が経済的便益を損なうことになるという潜在的な因果関係を、彼らが実践感覚の次元で認識できていないことから生じている。BDF は、「環境配慮的社会生活モデル」の構築と、エコツーリズムの確立に貢献し、経済的便益の実現を通して持続可能な経済成長を達成するとともに、水上村の自然共生的生活システムの持続性にもつながる、ひとつの重要な鍵となり得るものである。

開を促した事例、の二つの方向があると指摘している[太田 1996: 208]。

[27] 例えば、ベトナムにおけるエコツアーの先進地であるホアビン地方では、1979 年以降、政府の管理の下、主にソヴィエト連邦や東欧諸国からの観光客の受け入れを始めた。訪問者からは入村料を徴収するようになった[鈴木 2010: 254]。

[28] 高い観光商品を買うことができるのは「フーピー(whoopie: wealthy, healthy, older people)」と呼ばれる富裕層である。彼らは、豊かな「北」の、工業国の出身で、年齢は 40 代後半から 60 代前半、通常の観光地には飽きてしまい、なにかオリジナルな場所を求めている旅人である[Mowforth2003: 131][山下 2002: 703]。

[29] [関根 2000: 15-16]参照。

[30] 筆者の HBMD 担当者からのヒアリングによる。水上村住民の移転計画があり、全員ではないが「陸上がり」を実施することが決定済みだという。しかしながら水上村の筏住居や養魚池などを撤去するわけではなく、しばらくは陸の新住居と水上村とを行き来することになるということであった。実際の住宅が陸になるのであれば、水上村自体は、「生活の場」よりも「観光資源」としての機能が相対的に高まる可能性がある。

[31] タイのカレン族は、森林資源の真っただ中に暮らしている。彼らに向けられたまなざしとしては、一方では「森林資源破壊の元凶」とみなすものがあるが、他方では、「彼らの森林との共住の歴史」を評価し彼らの森林への権利を認めようとするものもある。そこでカレンは自ら、「森林破壊者」としてのレッテルに対抗すべく「森を守る先住者」としての様々な知恵を披歴し、自らの歴史を再構成し、文化を語ることで、次第に厳しくなっている山地での持続可能な生業の方途を探ろうしてきた。そのひとつとして、森の守り人としての自らの文化をアピールし、同時に山の生活を守りながら経済的にも見返りを得られる、地元民主導のエコツーリズムが提案された。エコツアーを催行する組合が、タイ観光局の地元支局の支援で設立された[速水 2002: 730-733]。

参考文献

アーリ, J.(1995),『観光のまなざし: 現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳、法政大学出版局(りぶらりあ選書)。

アーリ, J.(2003),『場所を消費する』武田篤志他訳、法政大学出版局。

浅川滋男(2010),「文化的景観としての水上集落論: 世界自然遺産ハロン湾の地理情報と居住動態の分析」（科学研究費補助金萌芽的研究研究成果報告書, 2007-2009 年度）鳥取環境大学浅川研究室編集。

池田光穂(1997),「コスタリカのエコ・ツーリズム」『移動の民族誌』(岩波講座文化人類学７)青木保他編、岩波書店所収。

石森秀三編(1996),『観光の二〇世紀(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容)』ドメス出版。

石森秀三(2002),「21 世紀は「自律的観光の時代」」科学 7(72): 706-710。

太田好信(1996),「エコロジー意識の観光人類学ーベリーズのエコ・ツーリズムを中心に」『観光の二〇世紀』(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容; 3)石森秀三編、ドメス出版: 207-222。

海津ゆりえ(2012),「サバ州キナバタンガン川流域におけるエコツーリズムの背景と実態: 持続可能な自然保護・地域社会・観光の融合への模索」文教大学国際学部紀要 23(1): 73-84。

金井雅之(2014),「東アジア観光市場におけるベトナムの位置と今後の研究課題」専修大学社会科学研究所月報 606-607: 96-107。

北尾邦伸(2002),「地域のなりわいとエコツーリズム」科学 7(72): 696-700。

木村大樹編(2004),『ベトナム: 技術指導から生活・異文化体験まで』(海外・人づくりハンドブック/海外職業訓練協会編; 20)海外職業訓練協会。

小林天心(2010),「新しいベトナム旅行のあり方を探る: 日本アセアンセンターベトナム北部・中部観光調査報告から」亜細亜大学経営論集 46(1): 57-84。

杉本久未子(2006),「エコ・ツーリズムと地域社会--ケニアの自然観光から」大阪人間科学大学紀要(5): 79-86。

鈴木涼太郎(2010),『観光という「商品」の生産: 日本ーベトナム旅行会社のエスノグラフィ』勉誠出版。

須藤定久(1999),「ベトナムの景勝地「ハロン湾」を訪ねて--ハノイ平原北部の地下資源」地質ニュース(539): 7-14。

関根久雄(2000),「「カスタム」としての熱帯林: メラネシア島嶼国における開発と熱帯林の「管理」(統一テーマ:住民参加による熱帯林管理の可能性を探る-多面的アプローチ,2000 年春季大会論文)」林業経済研究 46(1): 11-18。

高橋玲(2009),「文化と権力ーブルデュー」『古典から読み解く社会思想史』中村健吾編著、ミネルヴァ書房: 247-266。

田中勝(2011),「ベトナム・ハロン湾のごみ対策」連載『世界のごみ事情』鳥取環境大学環境学部環境マネジメント学科ホームページ (http://dem.kankyo-u.ac.jp/gomijijou/180-vietnam.html　2013 年 9 月 14 日閲覧)

張漢賢、浅川滋男(2008),「517 世界自然遺産ベトナム・ハロン湾における水上集落の居住実態とその変容(その 1)(建築計画)」日本建築学会中国支部研究報告集(31): "517-1"-"517-4"。

土居亜希子(2011),「世界遺産ハロン湾の環境改善のために」ビナ BOO(JICA): 2011 年 1 月号掲載 (http://www.jica.go.jp/vietnam/office/information/report/pdf/namidayori_08.pdf　2013 年 9 月 14 日閲覧)

長沼さやか、塚田誠之、浅川滋男他(2007),「水上居民の家船居住と陸上がりに関する文化人類学的研究--中国両広とベトナムを中心に」住宅総合研究財団研究論文集(34): 65-76。

日本貿易振興機構海外調査部(2011),「ベトナムの環境に対する市民意識と環境関連政策」ジェトロ。

速水洋子(2002),「見られる側からのエコツーリズム」科学 7(72): 730-734。

ブルデュー, P.(1988),『実践感覚Ⅰ』今村仁他訳、みすず書房。

ブルデュー, P.(1990),『ディスタンクシオンー社会的判断力批判Ⅰ』石井洋二郎訳、藤原書店。

ブルデュー, P.(1990),『ディスタンクシオンー社会的判断力批判Ⅱ』石井洋二郎訳、藤原書店。

ブルデュー, P.(1990),『実践感覚Ⅱ』今村仁他訳、みすず書房。

真板昭夫他編(2011),『エコツーリズムを学ぶ人のために』世界思想社。

敷田麻実他編(2008),『地域からのエコツーリズム: 観光・交流による持続可能な地域づくり』学芸出版社。

山下晋司(2002),「エコツーリズムの政治経済学」科学 7(72): 701-705。

山田勇(2002),「エコツーリズムと生態資源」科学 7(72): 690-685。

Bourdieu, P.(1979), *La Distinction: critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit.

Bourdieu, P.(1980), *Le sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit.

Doling, T.(2010), *Mountains and Ethnic Minorities: North West Viet Nam*, The Gioi Publishers.

Fennell, D.A.(2003), *Ecotourism (2nd Ed.)*, Routledge.

The Guardian(2012), ‘Ha Long Bay clean-up could force floating fishing village inland’ ,theguardian.com, Wednesday 14 November 2012 11.11 GMT.

Mowforth, M. and Munt, I.(2003), *Tourism and Sustainability (2nd ed.)*, London amd NY: Routledge.

Nguyen, T. T. M., Rahtz, D. R., and Shultz II, C. J.(2014), ‘Tourism as catalyst for quality of life in transitioning subsistence marketplaces: Perspectives from Ha Long Vietnam’, in *Journal of Macromarketing* (34)1: 28-44.

Nguyen,V. H. et al.(2014), ‘Estimating nonmarket values in Halong Bay, Vietnam: A view from theory of planned behavior’, in *Journal of Economics and Sustainable Development* 5(5) online.

Phuong, L.(2013), ‘Willingness to pay for utilization of Biodiesel fuel for tourist boats in Ha Long Bay, Vietnam’, SATREPS Group5 report (unpublished).

SATREPS Group5(2014), ‘5. Investigation of Co-Benefits Evaluation Method for BDF Utilization’, Report of group5 for JCC (unpublished).

Thai, T.(2011), *Marketing aspects in tourism development: The marketing analysis of Vietnam tourism industry for long term development*, Thesis for Business School, BA of Business Administration, Seinajoki University of Applied Sciences.

Tran Thi Mai Hoa(2010),「アジアにおけるエコツーリズムの展開--タイ・ベトナム・日本の経験から」千里山文学論集(84): 205-229。

Urry,J.(1990), *The tourist gaze : leisure and travel in contemporary societies*, London: Sage.

Urry,J.(1995), *Consuming places*, Routledge.